

談話室

サバティカル研修制度 による留学体験

熊本大学准教授； 松田 光弘
大学院自然科学研究科

私は2014年6月から翌年2月まで、熊本大学サバティカル研修制度にてオーストリアのウィーン大学(University of Vienna)に長期滞在させて頂いております。本稿では若手教員からみたこの制度の意義や効果、そして滞在先となっているウィーン大学等についてご紹介させていただきます。

大学教員にとってサバティカルとは、講義をはじめ教育や入試関係業務、その他大学の管理・運営に関する役割等を長期間免除される長期休暇のことであり、研究休暇や在外研究などとも呼ばれています。本学においてもサバティカル研修に関する規則第3条「サバティカル研修に従事することができる者は、本学の教員として勤務を開始した日から起算して5年以上継続して勤務した者とする。(以下、省略)」を満たし、自己申告した上で各部署の承認が得られればどの教員も利用可能な制度となります。これまでに本学工学部では数名の著名な先生方が活用されていますが、本制度設立の背景には若手教員のグローバル意識を高める制度でもあることを拝聴し、海外の環境を体感でき、さらに自身の研究も見つめ直す絶好の機会であると思い志願しました。滞在先にて知りましたが、海外でのサバティカル制度では、時に教科書や解説等の執筆にも充てるそうです。本制度の利点として滞在国外(複数国も可)・期間・研修内容等すべて自身の裁量に委ねられているため、滞在先について恩師に相談したところ「著名な先生も良いかもしれないが、選択肢として若手の教授で精力的に活動され今後のパートナーとしてつきあっていける研究グループはどうか？」と御助言頂きました。このアドバイスを念頭に最新鋭の設備が整っている研究室も検討しましたが、研修後も現有の装置による研究の持続性を優先し、かつ一緒に滞する家族の安全面も考慮した上でウィーン大学 Electron Microscopy Group に行くことにしました。

オーストリアの首都であるウィーンは、オペラ座や楽友協会など「音楽の都」として有名で、ヨーロッパ圏内をはじめ世界各地から多くの観光客が訪れます。また世界遺産に登録されているシュテファン寺院やシェーンブルン宮殿など市内随所に歴史的建造物や文化遺産が並んでいます。その市内約20ヶ所に存在するウィーン大学は1365年創立のドイツ語圏内最古の総合大学で15学部、4センター、約92,000人の学生が在籍しています。有名な物理学者ボルツマンやシュレーディンガーをはじめ11名のノーベル受賞者を輩出しており、その他教鞭をとったドップラーなどの名前が大学構内のホールやレクチャールームにも名づけられています。

滞在先は Physics of Nanostructured Materials, Electron Microscopy Group, Thomas Waitz 先生と Christian Renten-

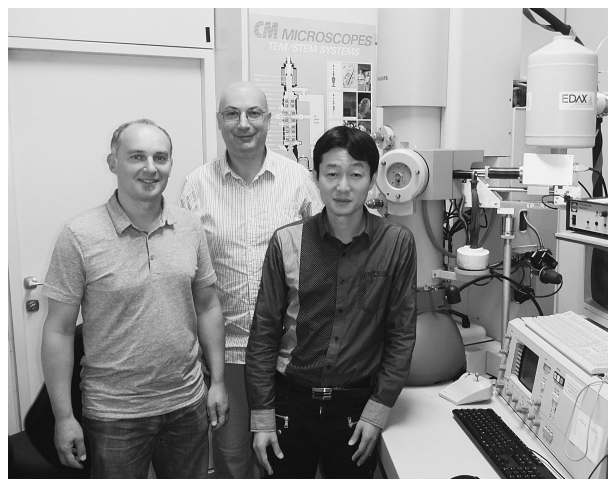


図1 Electron Microscopy 研究室にて：左から Prof. C. Rentenberger, Prof. T. Waitz, 筆者。

berger 先生にお世話になっています。ここでは金属間化合物や形状記憶合金などの微細粒における相変態および格子欠陥等について、X線や透過電子顕微鏡による微細構造解析を実施しています。誰もが海外研究機関にて体感するように教員と学生との距離感が近く頻繁にディスカッションが行われており、研究スタイルとしては膨大な実験データを出すことなく、数少ない貴重なデータから多角的に考察を行う傾向にあります。また研究室には Master コースから配属され、Doctoral Students および Post Docs を中心に運営されています。

滞在して5ヶ月目になりますが、サバティカル制度を利用して海外留学を行うことに良し悪しがあるように思えます。日々の実験を重視する研究者にとっては、マニュアルや独特な癖など熟知した自前の装置がある日本国内に留まった方が研究は格段に進みますが、留学によって客観的な視点で自身の研究スタイルや研究室運営を振り返ることができ、また指導学生との接し方についても見直すことができると思います。さらに海外の大学講義やセミナーに参加することで、学生と教員との双方向型講義も体感できます。研究内容によっては帰国後も共同研究という形で実施でき、それを通じて学生も含めた研究者間の交流など人的ネットワークも広がります。したがって、本制度を利用することで実験進度の遅れを考慮してもそれを凌ぐ多くの貴重な経験と波及効果が得られると思います。しかしながら、一方で本制度を利用することは、当事者に代わって他の方々に日常業務の負担を強いることにつながるため、組織全体の相互理解と特に若手教員が申請できるような雰囲気づくりが必要不可欠であり、今後さらに本制度申請への敷居が低くなることを願う次第です。

末筆になりましたが、本制度の申請から後押し頂いた先生方、お認め頂いたマテリアル工学科の先生方、革新ものづくり教育センター関係の皆様、そして滞在中今もお公私に渡って大変お世話頂いている Thomas Waitz 先生と Christian Rentenberger 先生、そして研究室の皆様がこの場をお借りして御礼申し上げます。

(2014年10月14日受理)[doi:10.2320/materia.53.628]

(連絡先：〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1)